From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.11

## ラニ！（こんにちは）

日本では、夏から秋にかけて、台風に見舞われることがありますが、こちら南半球では、サイクロンという嵐がやってくることがあります。サイクロンシーズンは11～4月、今年は、3月に2回もやって来ました。

雨風の強さは、台風と同じくらいだと思いますが、海と山のうなり声が、街で迎える台風とは、大違いです。

しかも、家の造りが、簡単なので、いつ飛ばされることかと。屋根はリーフ（葉）でできているので、激しい風でめくれあがってしまうのです。風対策に、屋根の上にさらに重しにココナツリーフを置いてくれたのですが、一度、一瞬空が見えたときは、血の気の引く思いをしました。
それに、窓もドアも閉めているのに、家の中を突風が吹き抜けていくし……。（すき間があるのです）
トイレは外にあるので、行くタイミングがむずかしいし……。

夜は本当にこわくて、一人で歌を歌ったり、ウォークマンをガンガン聴いて、風の音が聞こえないようにして、どうか無事　朝が迎えられますように……　祈りながら眠りました。

朝になって外へ出てびっくり!!　木々は倒れ、果実は落ち、我が家は、トイレのドアがなくなっていました。
我が家は被害が少なかったのですが、村によっては、8割の家が壊れてしまったところもありました。

日本のように救援物資が届くという訳ではないので、めちゃくちゃになったガーデン（畑）の中から、食べられるものをさがしてくるしかありません。

でも、やはり、たくましいのです、島の人は。次の日には、木や竹を切り出してきて、倒れた家を修理し、倒れた木々を片付け、大人も子どももみんなで力を合わせて、自分たちで、復旧していきました。

あれから1ヵ月、新しく建てはじめた家も次々とできあがってきています。 もう今年はサイクロンは来ないと思いますが、できれば、来年も来てほしくありません。

（1996.4）
それでは、また……

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.12

## ラニ！（こんにちは）

こちらヴァヌアツでは、２月から始まった１学期は、５月の第１週で終了し、２週間のお休みに入りました。
１学期最後の日には、保護者が、果物やラプラプ、ご飯などを持ち寄り、ちょっとしたバザーをひらきました。
その収益は、今回は、砂場の砂を運ぶトラック代に使うことになっています。
このように、バザーをひらいたり、草刈りや園の整備など、子どもたちのために、保護者も頑張ってくれています。

しかし…　１学期が終って、保育料を払ったのは、わずか5分の１の家庭のみ。あとは、払えない ― 。払わない ―。事情はそれぞれ。国からの補助はなく、保育料のみで運営しているので、保育料が集まらないと、先生の給料もなし ―。　今、ヴァヌアツのあちこちで起こっている問題です。

この１学期、私は、５つの幼稚園を訪ねました。

**ロルタボラ幼稚園**

私がベースにしているところ。
セラ先生と子ども17人。
４月下旬に、園舎を引っ越す。
（前のところは、家賃が払えなくて）
新しい所は、壁が一部こわれているものの、広くて明るくて、私は気に入っている。

**アカベ幼稚園**

メイ先生と子ども32人!!　もちろん3～5才全員一緒。でも、よくまとまっているんですよ。
メイ先生は、自由あそびのときも子どもとあそぶ、とても素敵な先生。職業訓練校に併設されているので、２人の生徒が実習中。

**アロンバラツ幼稚園**

今年から始まった幼稚園。
でも、結局、先生が確保できず、3月末で閉園。残念……
新しい人材養成が大きな課題のひとつ。

**アタングルア幼稚園**

海の見える丘の上にある。
庭の大きな木には、ブランコとネットが吊ってある。教室は狭くて、床は土のまま。でも、ジョアンナ先生の元気が、あふれています。子ども12人。ジム君という男の子が、先生の見習い中。とにかく、元気、元気、元気あふれる幼稚園。

**アンゴロ幼稚園**

小学校の近くにある。
ルイス先生と26人の子どもたち。
他の島から来ている学校の先生の子どもは、島の言葉がわからないので、ビスラマ語で話すようにしている。転勤族のいる村ならではの光景。

よくやっているなぁという面と、え～～～～!! という面とありますが、それは、これからゆっくり先生たちと考え合っていきたいと思います。今は、すてきな出会いに感謝しています。

(1996.5)

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.13

## ？？？　ある日のキンディーでの会話　―　小学生の女の子と―

私　　「あれ?!　今日学校は？」
女の子「・・・」　まゆげと目を少しあげる
私　　「休んだの？」
女の子「・・・」
私　　「病気なの？」
女の子「・・・」
私　　「どこか痛いの？」
女の子「・・・」
私　　「熱があるの？」
女の子「・・・」
私　　「家にいないの？」
女の子「・・・」
私　　「ここはキンディーって知ってる？」
女の子「・・・」
私　　「ここにいたいの？」
女の子「・・・」
私　　「どうして？」
女の子「・・・」
私　　「あなた、キンディーの子どもなの？」
女の子「ちがう・・・」

と、こんな風に、続いていくのです。「・・・」のとき、相手はまゆげと目を少しあげるだけ。これが、ヴァヌアツ人のイエス（はい）なのです。

☀　日本人は、イエス・ノーがはっきりしないと言われていますが、ここ、ヴァヌアツ人も　イエス・ノーははっきり表しません。目とまゆげを少しあげるのが、イエスだと気づくまで、1ヵ月ぐらいかかりました。
私の言ってることが通じてないのかなと思ってましたが、このわずかな表情の動きが、実は、イエスだったのです。

☀　村人は、みんな家族、みんな力を合わせて仲良く暮らしています。お互いのことは、何でもよく知っているし、誰とでも親しく話をしています。しかし、これだけ密接に関わっていると、当然色々なことがあるわけで、うわさや陰口はすごいということです。
　そんな村で暮らしていると、自分を強く出すことはできないわけで、何でもあいまいに慣れ合いですませてしまいます。そういう面では、日本人に似ていますよね。

☀　現代の日本の社会では、自分の意見を持つことが、かなり要求されてきています。ヴァヌアツでは、仕事でも、この慣れ合いですませてしまうので、それは、ちょっとやりにくいところです。
議論というほどのことでもなく、単に意見を交換しているだけでも、そのうち、「まぁまぁまぁ……」という感じで、あいまいになってしまうのです。

☀　「ヴァヌアツでは怒っちゃだめ」強く言ってもうまく事ははこばない。
「ヘラヘラしている人が、ヴァヌアツ人は好きだから」と先輩隊員。
だから、仕事でもヘラヘラすることを心がけ（？）、大事なことを言うときは、少しだけ真面目な顔で、相手の目を見て話す、そんな風にしています。

（1996.6）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野 元美

No.14

## 絵が描けない?!

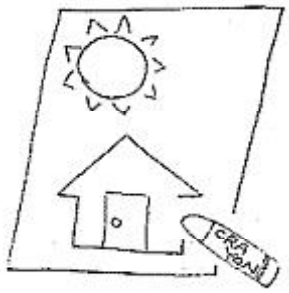
幼稚園にはってある絵、吊ってある製作物、私は、子どもが描いたもの、作ったものだと思っていました。でも、実は全部、先生が描いたもの、作ったもの。そうなのです。島の人達は、大人も子どもも、お世辞にも、絵がうまいとは言えないのです。

始めは、こんな絵しか描けないの?! と、あきれてしまいましたが、ここの暮らしを知るにつれて、色々なことに気付いてきました。

まず、絵を描く機会が少ないこと。紙が手に入らない。使い古しの紙（裏が白紙の）ですら、島で手に入れることはむずかしいのです。学校に行っても、図工の時間などありませんから、絵を描く機会に恵まれず、大人になってしまうわけです。

次に、身の回りに絵がないこと。日本では、絵本があり、テレビがあり、道を歩けば、看板がありと、あらゆるところで絵を目にする機会があります。でも、ここには、ないのです。本当にないのです。 私たち日本人の頭の中には、数え切れない程の絵が無意識のうちに、収まっていることだと思います。島の子ども達が目にする絵は、先生が描く左（編注：↑上）のような絵だけで、それで、さあ描きましょうと言っても、絵で自分を表現することはむずかしいのではないかなと感じました。（色々な意見があると思いますが、私は今、こう感じています）

彼らは、絵は苦手です。でも、マット（ゴザ）やバスケットを編んだり、バナナの葉で食べものを包んだり、ナイフを使うのは、とても上手です。人間は、環境によって、開発される能力が違ってくるんだなと感じます。




（1996年7月）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.15

**ラニ！**　みなさん　お元気ですか。少しごぶさたしてしまいました。9～10月は、5週間かけて、遠くの村々の幼稚園を泊まりながら、巡回していました。

## 手洗いのこと

ヴァヌアツの人々に、手を洗う習慣はありません。洗うのは、手が汚れたとき。最近は、WHO（世界保健機関）等のプロジェクトもかなり入ってきているため、食事の前やトイレの後、手を洗った方がいいという知識はもっています。でも習慣づいてはいません。

ほとんどの幼稚園で、おやつの前に手を洗っています。（水が近くになくて、、洗えない所もあります）
しかし、問題は洗い方。1つのバケツで、全員が洗うので、後の方の子どもは、まっ黒な水で洗うことになるのです。私なら、そんな水で手を洗いたくないと思いますが、彼らは平気なんですね。もちろん、水が乏しいという現実もあります。

そこで、私は考えました。同じバケツ1杯の水でも、少しずつ分けて使えばいいのです。本当は、流水で洗うのが一番いいことはわかっていますが、それでは、水がたくさん必要なので、仕方ありません。1～2人の子どもが手を洗えば、もう水はまっ黒。「水が汚くなったから、変えるね」と、新しい水をまた少し入れて、次の子どもが洗います。毎日続けていると、子どもたちが覚えてきて、水を変えるようになってきました。“きれいな水”と“きたない水”の区別が、身についてほしいなと願っています。

ただ、私の中に迷いもあるのです。手洗いが彼らにとって、本当に必要なのかということです。だって、彼らは手を洗わず、手づかみで食べても、病気にならないのですから。それでお腹をこわすのは、私たちなんです。清潔な環境で暮らしてきた私たちは、抵抗力がなく、弱いのです。彼らは、病気にならない程度の衛生感覚は持っているわけだし、清潔にしすぎることで、人間が弱くなるのなら、このままでいいのかなと思ったり…。

皆さんは、どう思いますか？

（1996.10）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.16

## ☀ Yosakoi Yosakoi !!　シャンシャンシャン!!

元気なかけ声、鳴子の音が青空の下でひびいています。
高知の皆さまから送っていただいた鳴子で、子どもたちと踊っています。よさこい鳴子踊り!!

先日、小学生を集めて、日本のこと、高知のことを地図で写真を見せながら話しました。

| | |
|---|---|
| ヴァヌアツの人口 | 160，000人 |
| 日本の人口 | 125，000，000人 |

と書いた紙を見せると、**オー！**　と大人も子どももどよめき。（大人もたくさん回りで見ているのです）
踊る前に、よさこいの歌を歌ってきかせると、みんなウットリ?!

さて、いよいよ鳴子を手に、よさこいダンス!!
この日は、42人の子どもが集まって、みんなで輪になって、踊りに踊りました。子どもたちの反応は予想以上。笑顔、笑顔、心から楽しんでいました。私と同じくらいの背丈の5，6年生の子どもたちも、本当に楽しそう。（みんながするから）仕方なく踊っている子どもなんて、一人もいない感じ。
そして、また法被が似合うのです！　白地に赤で染めぬいたデザインがよく映える、南の島にぴったり。（写真を見てください。同封しています。）
長い旅をしてきた鳴子と法被も、ペンテコスト島の子どもたちにこんなに喜んでもらえて、幸せでしょう。高知の皆さま、本当にありがとうございました。

☀ クリスマス前には、踊りはもちろん、そのあと、よさこいのビデオ・ショーも開く予定です。子どもたちへのクリスマスプレゼントです。
☀ 2つの幼稚園では、ブレイクアップ（終業式と卒業式をかねたもの）で、よさこい踊りをお家の方に見てもらいました。それでは、皆さん、

***Merry Christmas***
***and***
***Happy New Year.***

（1996.11）

# ヴァヌアツだより　No.16　写真

後列左端が筆者。

写真中央が筆者。

編注:

ちょうどこの年、よさこい鳴子踊りの直前に、高野隊員から「ヴァヌアツの子どもたちに、高知のよさこい鳴子踊りを紹介したいので、いらなくなった鳴子が集められないでしょうか」という相談が当OB会に寄せられました。

このため、**高知県協力隊を育てる会**　を通して**高知新聞** に鳴子の提供を呼びかける記事を掲載していただいたところ、記事を読まれた方や、高野隊員の勤務先の関係者の皆さんから、予想をはるかに超える、合わせて約90組の鳴子と、ヴァヌアツの子どもたちへのオリジナル法被約50着を寄付していただきました。現地でも大変喜んでもらえたとのことで、ご協力いただいた皆様に、改めて御礼申し上げます。

特に、D社さんからは、鳴子60組の他、わざわざ素敵なオリジナルの法被まであつらえていただきましたが、このとき、I代表がおっしゃった言葉は、大変印象的なものでした。

「僕には大したことはできんけど、これがきっかけになって、将来ヴァヌアツから（よさこい鳴子踊りに）踊り子隊が来てくれるようになったら、すばらしいねえ。」

高野さんからの呼びかけに県民の皆さんが応え、ヴァヌアツに蒔かれた種が育ってくれることを願っています。

---

No.17

**ラニ！**　早いもので、ヴァヌアツに来て、一年がすぎました。一年前は、首都ポートビラのクリスマスの様子をお便りしましたが、今年は、ペンテコスト島でのクリスマスをお知らせします。

11月頃から、村々では、若者や子どものグループがクリスマスの歌の練習を始めます。そして、クリスマスの少し前から、家を一軒一軒回って、クリスマスの歌を歌っていくのです。夜、来ることが多いので、ランプの明かりの下で美しい歌声がひびき、幻想的です。

そして、クリスマスイブ（12月24日）は、私はジョアンナという友人の家に泊まりに行きました。
村のナカマロと呼ばれる集会場に、クリスマスツリー（といっても、ただのふつうの木だけど）が置かれ、みんながそれぞれ名前を書いたプレゼントを吊るしておきます。夕方、村のみんなで集まって、プレゼント交換をします。プレゼントは、缶詰、米、ビスケットなど食べものが中心。

そのあと、教会で、2人の子どもの洗礼式、クリスマスのお話の歌、クリスマス礼拝と続き、終ったのは、夜中の12時ぐらい。それから、ジョアンナとケーキをつくり、寝たのは、2時すぎだったかな。

次の朝は、村のみんなで持ちよって、一緒に食べました。村の中で、ケーキを焼いた家は、ジョアンナの家だけ。しかも、その材料は、私が持っていったものなので、これで村の暮らし（経済）がわかるでしょう。私たちの焼いた2つのケーキを、昨夜、洗礼を受けた2人の子どもがケーキカットして、みんなで分けました。

クリスマスは、年に一度の大イベント！　いっちょうら　←まさに、そのとおり。本当に一着しかない。　の服を着て、子どもには、キャンディーや風船を買ってあげてせいいっぱいのぜいたくをします。

村によって、クリスマスのお祝いの仕方はちがいますが、みんなで集まって、分けあって、というスタイルは共通しているようです。

心のこもった、南の島のクリスマスでした。

（1996.12）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.18

ヴァヌアツでは、２月から学校・幼稚園の新年度が始まります。
２月の始めに、ペンテコスト島北部の幼稚園の先生対象に講習会をひらきました。

## １日目

＊グループ討議：保護者に伝えるべきこと、伝える方法について
例えば、子どもに皮膚疾患があるとき、どう伝えるか。おやつを持ってこない家庭にどう伝えるか、など

## ２日目

＊日案、週案、月案、年案の紹介

＊手あそび、ダンス（アイアイ、キャンプだほい、など）

＊仲間づくりゲーム

＊絵本づくり
『わたしのワンピース』をもとにして、それぞれお話を考えて、絵本を作る

## ３日目

＊絵本の発表

＊『わたしのワンピース』の歌に、振りを考える（グループで）

＊色つきオニ

＊手あそび（森のきつつきさん）

ざっと、こんな感じでやりました。
私たち外国人ボランティアが講習会で教えるだけでなく、最終的には、ヴァヌアツ人同士で教えあっていける形を目指したいので、半分は、ヴァヌアツ人の先生に受け持ってもらっています。

日頃、学ぶ機会に乏しいので、講習会には、泊りがけで、熱心に参加してきます。赤ちゃんにおっぱいをあげながらの人も多くて、頭が下がる思いです。

そして、こういう講習会で学んだことを、どう実践でいかしていくかが、一つの大きな課題です。それを一緒にやっていくのが、私の仕事でもあるんですよね……

頑張らなくては……です。
（1997.2）

---

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.19

## ラニ！　皆さん、お元気ですか。

ご進級、ご入園おめでとうございます。
春のあたたかい日差しの下、子どもたちの笑顔がはじけていることと思います。

今日、今までのヴァヌアツだよりを読み返してみました。
何もかもがただただうれしかった始めの頃のたよりを読むと、少し恥ずかしくなってしまいます。
　一年四ヵ月たった今でも、基本的には、毎日、楽しいのですが、毎日のことですから、当然そうでないときもあるわけです。例えば、道で人に会ったとき、ここは田舎なので、全員とあいさつをかわします。
そのとき、「どこに行くの？」と聞かれます。これも、あいさつの一部になってます。何でもないことですが、虫の居所が悪いときは、「どこでもいいでしょう!!」とムッとしてしまったりするのです。

始めの頃は、　**ウワ～～～何これ?!**　と思ってたことでも、今では、慣れてしまって何とも感じないこともたくさんあります。新鮮味がなくなったといえば、そうなのですが、だからこそ、こうして元気にやっていけているといえば、そうでもあります。慣れるということには、いい面と悪い面がありますが、今の私は、人間の持っている慣れるという能力をありがたく（？）思っています。

## 今となっては、慣れてしまったこと　イロイロ…

**ネズミくん**
こいつには、本当に苦労させられてます。でも、今となっては、いるのが当たり前なので、たまに2～3日静かだと、どうしたのかなと心配に（？）なります。

＊見られること
つかれるよー

＊質問ぜめ
これもつかれるー

＊あいまいな時間
　　私もいいかげんになっている?!

＊てきとうな約束
　　私もてきとうにしている?!

**食事の方法**

地面の上に、バナナの葉をしいて、その上に食べものをおいて、手で食べる。しかもその手は洗っていない。始めは、ダメでしたね。今は、全くOK。手を洗いに行くタイミングもつかんだしネ。

（1997.4）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

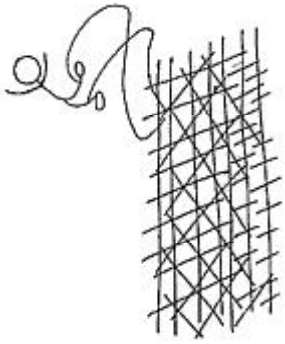
―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.20

## ラニ！　みなさん、お元気ですか。

先日、“ナゴール”というお祭を見に、ペンテコスト島の南へ行ってきました。
このナゴールは、ヤム芋の収穫への感謝と来年の豊作を願って、ヤム芋の収穫の始まる4～5月、行われます。また、男の子にとっては、一人前になる儀式でもあります。



木を組んで作った高さ20メートルほどのやぐらの上から、足首をヤム芋のツルでしばり、飛びおりるというもの。そう、あのバンジージャンプの原型なのです。でも、ナゴールはあそびではないので、自然に上に引きあげられることも、下が川ということもありません。うまく着地しないと、それこそ、大ケガ、時には命までも落としかねません。
と、非常にめずらしいお祭なので、近年、やや観光化され、私たち外国人は入場料を払わなくてはいけません。これが高いのです、けっこう……

おどろいたのは、7～8才の子どもから飛び降りるのです。高さは、3m～10mぐらい。この地方の子どもたちは、ヨチヨチ歩きの頃から飛ぶことに親しんでいるのだそうです。
やぐらの一番上（20メートル）から飛びおりるのは、10代後半の男の子たち。飛ぶ前は、精神集中にかなり時間をかけます。カメラ、ビデオをかまえ、上を向き、まだか、まだかと待つ私たち。首が痛―い!!　でも飛ぶのは一瞬だから、見逃すわけにはいかない…　ガマンガマン。
その日、一番上から飛んだトップボーイは、ウィリー。見事に飛びました。着地した時、ツルが片方切れたけれど、立派に一人で立ち上がりました!!

ナゴールを見て、やっぱりこの人たち、ただ者ではないなあ―　と思ったことです。スゴイ!!

ビデオをとったので、帰国したら、みんなで見ましょう。
それでは、みなさん、ごきげんよう。

（1997.5）